

|      |               |
|------|---------------|
| 研究区分 | 教員特別研究推進 教育推進 |
|------|---------------|

|       |                            |       |           |    |       |
|-------|----------------------------|-------|-----------|----|-------|
| 研究テーマ | 多様なマイノリティとの共生を推進する教育に関する研究 |       |           |    |       |
| 研究組織  | 代表者                        | 所属・職名 | 国際関係学部・講師 | 氏名 | 二羽 泰子 |
|       | 研究分担者                      | 所属・職名 |           | 氏名 |       |
|       |                            | 所属・職名 |           | 氏名 |       |
|       |                            | 所属・職名 |           | 氏名 |       |
|       | 発表者                        | 所属・職名 | 国際関係学部・講師 | 氏名 | 二羽 泰子 |

|   |  |
|---|--|
| <b>講演題目</b>   |  |
| 多様なマイノリティとの共生を推進する教育に関する研究  |  |
| <b>研究の目的、成果及び今後の展望</b>  |  |
| <p>本研究の目的は、厳しい背景のあるマイノリティへのヘイトや無関心が横行する昨今において、本学の学生が、マイノリティへの差別問題や多様な人々との共生の問題と向き合うために必要な教育実践について研究することである。</p> <p>現在本学にも、性・ジェンダー、障害の有無、文化背景、経済的背景などにおいて、多様な学生が在籍している。また、SNS等を通じて、学生が多様な人々との交流や情報を得る機会が増加すると共に、無自覚のうちに差別やヘイトに加担したり巻き込まれたりする機会も増加している。このような背景の下、本学で学ぶ学生が、差別問題やマイノリティとの共生について学び、行動する機会を創っていくことは喫緊の課題である。</p> <p>そこで本研究を通じて、差別問題や共生の問題に、自らの問題として向き合う姿勢を醸成する教育はどのようなものかを分析した。</p> <p>その結果、授業での映像教材やアクティビティを通じ、マイノリティの問題を他者の問題ではなく、自らの問題として認識する機会を得ることによって、学生が当事者性をもって差別問題と向き合うようになるとともに、差別問題における自らの立ち位置を意識するようになることが分かった。具体的には、マイノリティが不平等な立場に置かれていることのみを示す教材の提示では、マイノリティをめぐる差別問題は自らには無関係なものとして他者化されたが、例えば「青い目、茶色い目」のように、純粋な子どもたちが数分のうちに差別者になっていく映像を見た後には、マイノリティをめぐる差別は自らの問題だとする意識の高まりから、解決策を話し合うディスカッションが白熱した。また、マイノリティの差別問題の映像を見た際には当たり障りのない発言や差別者に対して攻撃的なコメントが目立ったが、自分がどの立ち位置からその問題を考えていたかを振り返ってもらうアクティビティを通じて、無関係だと考えること自体が差別者の立場に近いのではないかなど、学生たちが自らの立場の当事者性について活発に議論するようになった。</p> |  |